



東日本大震災に思う

会長 高木 陽助

「おびたしく大地震ふるること侍りき。」

そのさま、よのつねならず。山はくづれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ舟は波にたゞよひ、道行く馬はあしの立ちどをまどはず。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず。或はくづれ、或はたふれぬ。塵芥たちのぼりて、盛りなる煙の如し。地の動き、家のやぶるゝ音、雷にことならず。家の内にをれば、忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なれば、空をも飛ぶべからず。龍ならばや、雲にも乗らむ。恐れのかなに恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覚え侍りしか。

かく、おびたしくふる事は、しばしにて止みにしかども、その余波、しばしは絶えず。よのつね、驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日・二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、若は一日ませ、一三日に一度など、おほかたその余波、三月ばかりや侍りけむ。」残っている。

目次

- ・ 東日本大震災に思う 高木陽助：p1
- ・ 講演会「プロレタリア作家葉山嘉樹と現代」印象記 和田崇：p1
- ・ 『太陽のない街』と私 廣島正：p2
- ・ 「労働の価値」が意味するもの 和田崇：p3
- ・ 徳永直文学散歩④：p7
- ・ 二〇一一年度「孟宗忌」：p7
- ・ 会計中間報告：p8

右は鴨長明の『方丈記』の一節。元暦二年（一一八五年）七月九日の大地震の様子を述べたものである。三月十一日の東日本大震災の様子を彷彿させる描写に驚く。八百二十六年前も大地震が日本を襲っている。その前、斉衡二年（八五五年）にも大地震があつて、東大寺の大仏の首が落ちたそうである。歴史は繰り返す。

格差社会が進行し、真面目に働く労働者が苦しむ世の中にならぬように、政治にも目を向けたい。

講演会

「プロレタリア作家葉山嘉樹と現代」印象記

和田 崇

昨年九月にホームページを開設した成果がさつそく現れた。ホームページを閲覧された（堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也の三人の偉業

を顕彰する会」の小正寺淑泰氏が、徳永直の会宛に表題の講演会のご案内をくださったのだ。以下はその講演会の印象記である。

一月六日、会場のみやこ町豊津公民館大ホール（福岡県京都郡）に用意された座席はほぼ全て埋まり、目測で百人近くの人が集っていた。まず、川本英紀氏（みやこ町歴史民族博物館学芸員）の「葉

山嘉樹と故郷豊津」は、葉山の出身地である豊津の歴史と風土に触れた上で、同じ豊津出身でも堺利彦は豊津が好きで多くの回想文を残しているのに対し、葉山は回想が少なく、むしろ嫌悪していた趣があり、その理由として、地方官吏の中でも地位の高い（郡長）であった父・荒太郎の存在が大きく、周りから立身出世を期待される重圧が、やがて故郷嫌悪の感情へとつながっていったのではないかと指摘された。徳永直の場合も、その生い立ちが少なからず故郷熊本への感情を形成しているので、作家と故郷の関係について考える上で興味深い内容であった。次に、葉山民樹氏（葉山嘉樹長男）の「父の思い出」は、作家としての葉山ではなく、家庭における葉山の貴重な思い出を語られた。その中でも民樹氏が強調されたのは、作品として表面に出た文学的思想とその裏面にある生活態度とのギャップである。葉山は計画的な理財の観念がなくて貧乏な暮らし



「葉山・鶴田顕彰会通信」と
「葉山嘉樹集」(筑摩書房)

を続け、金に困ると妻の菊枝が金策に出ることもあった。しかも、酒の量が次第に増えていき、最終的にはアル中のようなようになっていた葉山は、そんな妻が金策に失敗すると暴力を振るったこともあったという。作品と実生活の矛盾は徳永も孕んでいたもので、葉山も含めたプロレタリア作家全体の問題として考える必要があるだろう。最後に、樹沢健氏（文芸評論家・早稲田大学講師）の「だから、葉山嘉樹」は、葉山の文学が日本文学の伝統から外れた突発的なもので、そこにはフランスのシュルレアリスムやダダイズム、ロシア・アヴァンギャルドなど世界の文学との類似性が見られることを指摘された。また、小説「移動する村落」を紹介し、同作で「花ちゃん」という子供が父親にさまざまな質問をする場面を取り上げ、大人が答えにくい（沈黙している）社会の矛盾を子供の質問によって浮かび上がらせているという斬新な読みを提示された。樹沢氏は著書『だからプロレタリア文学』において徳永の「太陽のない街」を取り上げているので、今後、徳永直の他の作品についても新たな読みを提示してくださることを期待したい。

『太陽のない街』と私

廣島 正

私が『太陽のない街』を最初に読んだのは小学校五年生の頃だった。当時、三井三池炭鉱の労働争議が、総資本対総労働の対決と呼ばれるまでに高揚し、また安保反対闘争も全国的なものとして高

まっていた。そんな中で私は、冊子附録のソノシートを聞くことで現場の雰囲気を知っていた。その延長に『太陽のない街』があったのだ。だから、私は歳こそ若かったが、また一切の経験もなかったが、何の拒否反応もなく、すんなりとこの作品を受け入れていた。

二度、三度と読み重ね、友人たちにも勧めたりしたのは、東京東部で労働運動に手を染めていた頃だ。作品の最後に青年と婦人たちが「団旗を護れ！」と叫びながら組合大会の会場を出て行く場面は、七〇年代初頭の組合の雰囲気にならぬものを感じていた。

だが、私は学生出身のオルグではあっても、労働者そのものではなかった。労働者の階級的主張を支持する「立場」で、労働者と共に闘い、『太陽のない街』という作品に共感していたのである。

『太陽のない街』を始めとする徳永直の作品は、労働者自身がどう感じるかは別として、私は常に労働者の「立場」から読んできたように思う。だからこそ、作家としては色々あったろうが、作品は小林多喜二や宮本百合子よりも遥かに優秀だと言い得るのである。

「労働の価値」が意味するもの

—徳永直の転向作品と生産文学—

和田 崇

一 転向小説「冬枯れ」

短編小説「冬枯れ」は、冒頭で引用した年譜に「反動の波の中に腰をすえる場所をもとめてくるしんだ」とあるように、徳永の転向

期における苦悩が表出された作品である。その内容は、左翼作家の鷺尾和吉が「死にめにも逢へなかつた母親の一周忌と、残つてゐる老父を妹夫婦に頼むことや、いろいろ貧乏長男としての後始末」をするために東京から郷里の熊本に帰省するというものだが、鷺尾の帰省にはそれ以外の理由も存在していた。

鷺尾自身、複雑な自分の自分自身がわからなくなつてゐた。彼達の所属する作家団体は殆んど……しまひ、一部の仲間作家達は嵐の中をドシドシ身を挺してつきすすんでゐる現在、非常に困難な今後を控へて、できるだけ身軽にするために、家の後始末をしたり、父親に因果をふくめたり、可能なら子供の一人二人も預かつて貰ひ、とにかく仲間にい随いてゆかねばならぬと思ふのだが、すぐその一方では疲れきつた心身と……底なしに崩れゆくかとする感情があつて、たとへばこんどの帰郷でも、そんな積極的なプランをもちながら、どうにも跳び越せない大きな溝をかゝえたまゝ、あたふたと逃げ帰つたとも云へる気持ちであつた。

(「……」は伏せ字)

しかし「逃げ帰つた」先の熊本でも、鷺尾は現実と直面せざるを得ない。かつて鷺尾を三三度訪問した文化サークルのメンバー幾田は、監獄へ入れられた末に腹膜炎で死んだ。三・一五で検挙されたNは狂人となり、鷺尾が名前を呼んでも常人の反応を示さない。その結果、鷺尾は「決断」を迫ることを暗示する悪夢に頻りにうなされるのであつた。

「冬枯れ」と似た小説として中野重治の「村の家」(『経済往来

一九三五・五)がある。「村の家」の勉次は保釈願を書き、政治的活動をせぬという上申書を書くも、彼の所属していた団体が非政治的組織であり、彼が非合法組織に加わっていないかつたという主張は(上申書でそれに触れないことによつて)守り抜く。そして、転向出獄の後に帰省した「村の家」で、勉次は父親の孫蔵に封建主義の日本への現実認識をたしなめられる。周知のとおり、「村の家」は、吉本隆明が「転向論」(『現代批評』一九五八・一一)において転向小説の白眉としたのだが、その吉本によると、「銀次のころには、このとき日本封建制の優性遺伝の強靱さと沈痛さにたいする新たな認識がよぎつた」のであり、筆を捨てると言つた孫蔵に対して「書いていきたい」と言つた勉次の行為には、「封建的優性との対決に、立ちあがつてゆくことが、暗示せられて」おり、ここに「優性遺伝の総体である伝統」に対して屈服でもなく無関心でもなく、それを「対決すべき実体」として掴みとろうとする姿が表出されているのである。

このように、「冬枯れ」も「村の家」と同じく、故郷に帰り、そこで日本の封建主義的現実と直面するという点ではプロットにおける類似性がある。しかし、だからといって鷺尾もまた勉次と同じ態度を示すのではない。勉次が「封建的優性との対決」を意図して「書く」ことを決断したのに対し、鷺尾は全く別のかたちで「書く」ことを決断する。それは末弟の虎吉との出会いによるものだった。

この若者には少しも屈託がなかった。いま非常に調子のたかい、こんど出来たといふ第××団の軍歌を唄つてるかと思ふと、非常にハツキリした階級的なことを話す。鷺尾が内心駭

いてるのは、この若者には一寸も左翼がつたところがないこと、ちよつとも不自然でないことだった。(傍点〳徳永)

鷺尾は、車掌として働く虎吉が左翼的知識を身につけ、労働者としての階級性を充分に自覚しながらも、決してそれに傾くことなく、低賃金に対しても行動を起こさずに忍耐している姿に、労働者としての「凶太さ」を感じる。つまり「封建的優性」に対して適合し耐えること、そこに自らの進路を見出す。鷺尾は東京行きの汽車の中で、「労働者の癖にいつの間にか、俺も観念論者になつてたよ、冗談じゃねえ、老ひたりと雖も鷺尾和吉、これからなんだぜ」と、独り合点に喋る。そして、手帳を出して二三枚ちぎり、別れてきた末弟へ宛てて手紙を書く。

・・・虎吉君、俺は君に逢つたことが今度の帰郷での第一の収穫だった。俺はツイそつぽをむいてゐた。足が地べたを離れてゐたのだ。君達は近代プロレタリアートだ。君達は働く、君達は偉大な忍耐力をもつてゐる、君達は・・・。

徳永は「冬枯れ」の翌年(一九三五年)四月に発表した「小説勉強(一)」(『文学評論』)において、「私などは現在、ひどく観念的主観的になつてゐて、小説が描けないのである。まるで世間の見物聞く物面白くなくて、何か鉄の兜をかぶつたやうな気持である」と、その心境を素直に述べている。つまり、「冬枯れ」の鷺尾ないし筆者の徳永は、自らが労働者出身の作家でありながら、労働者意識から遊離した知識人的傲慢さを持つていたことを自戒し、この弾圧の

激化する時局に柔軟に適合しながら、労働者意識に根ざしていく、そのことを表明しているのだ。これが、「冬枯れ」を一般的に「転向小説」と呼ぶ所以だが、それが鷺尾の中で、あくまで後退ではなく前進あるいは「新しい道」として描かれていることが重要である。

吉本隆明は、先に引用した「転向論」において、日本の知識人の一つの典型として、「知識を身につけ、論理的な思考法をいくらかでも手に入れてくるにつれて、日本の社会が、理にあわないうつまらぬものに視えて」きながら、それが「絶対に回避できない形で眼のまえにつきつけられたとき」に「かつて離脱できなかつたその理に合わぬ現実が、いわば、本格的な思考の対象として一度も対決されなかつたことに気付く」ことを述べている。吉本の念頭には、獄中で「日本思想史」や「仏教史」を読んで転向したといわれる日本共産党幹部の佐野学・鍋山貞親の姿があるのだが、この分析は他の知識人にも多く当てはめることができるだろう。特に、労働者出身でもともと封建性がある程度身体化されていた徳永の場合もこの傾向が強く、先の「小説勉強(一)」の引用文には、吉本の指摘と似たような記述が見られた。しかし、徳永の場合は、労働者意識に回帰することを転向ではなく権力批判の一つの形態として捉えていた。そこに転向問題のアンビバレンスが潜んでいるのである。

以上のことから「冬枯れ」は、マルクス主義の理論や知識をインテリ的なものとしてそこから距離を取り、もともと彼が持っていた労働者性、庶民的性質、合法的性格といった「封建的優性」を再認識させる、あるいはその正当性を理由付ける作品であったといえる。作家同盟退直後の徳永が『文藝』(一九三三年一月号)誌上のアンケートに対し、「たとへ渚にうちあげられたとてぼくはペンを

離さぬ覚悟だけはしてゐる」と言ったその「離されないペン」は、非転向的な不屈や「封建的優性との対決」、いずれの意味を内包したものではなく、どう体制が変化してもそれに柔軟に適応して作品を書いてみせる、という宣言に他ならなかつたのである。

- 二 「労働者の価値」の転換
 - 三 「飛行機小僧」と生産文学
 - 四 生産文学という現象
- おわりに

については、紙面の都合上割愛させてもらった。
 ・本稿は立命館大学日本文学会第五三回大会(二〇〇九年六月一日)における口頭発表に基づいて書かれたものである。

徳永直文学散歩④

緒方 宏章

『女の産地』

一九二二年の夏の初め、鷺尾和吉は長崎県島原半島の「S時事新報社」で、はじめて新聞記者になった。

新聞社は、青ペンキ塗りの四角い建物で、港町と漁師部落の間へん、麦畑の真ん中にあつたが、二階が編輯室で、階下が工場、印刷機がうごき出すとグラグラ揺れるし、二階でお茶をコボすと、工場でさわぎたてるような建物であつた。

麦畑はもう穂が黄色くなつて、そのうねりがつきるところから、日増しに濃くなつてゆく有明海の水の色がたかく盛りあがって見えた。よく晴れた日などは、対岸の九州本土が濃紫色に姿をみせて、水平線には一ノ日何回となく、三井の石炭船などが現われ、しだいに大きく、それからやがて棒切れのように小さくなつて、この半島を迂回してゆくのだつた。



島原城より弁天町方面を望む

はじめ和吉は、仲間の新聞植字工、米村、角田、竹原の三人と一緒に、この半島に新しく出来た政党新聞に雇われて、対岸の三角港から海を渡ってきたのであつた。そしてまだ「新聞活字」さえ知らない土地の職人を相手に、東京物の新式ロールを組みたてたり、ケエスを作つたりして、やっと一ヶ月間で新聞を刷り出せるようにしたのだが、麦畑の真ン中で、肥料の匂いを嗅ぎながら、「鉄と糊」で編輯された新聞ばかり作つてしていると、まるで山ン中で、狐にでもつままれたような気がしてくるのだつた。

まったく二階からおりてくる原稿の大半というものは、大阪や東京への新聞を切抜いたものばかりで、その残りの半分だつて実にくだらぬ記事ばかりであつた。港新地あたりの芸者評判記、文学青年の投書小説、料理屋の提灯記事等々、どうかしたとき、主筆が

書くらしい、論説がおりてくるが、これにぶつつかつた職工は災難である。三行のうちに仮名は一字くらいしかなくて、この漢字がまた新聞活字の範囲では、殆んどめつからない種類のものばかりであつた。

〔徳永直文学選集〕より〕

一九二一（大正一〇年）二三歳

島原時事新報社（長崎県島原市弁天町）に雇われる。社長たちの意に反する有明湾埋め立て工事の暴露記事を書き、同時にストライキを決行。二日間工場に籠城の末、最後は暴力的に船に乗せられ追放される。

〔徳永直ホームページ〕より〕

島原までは、熊本港からフェリーで三〇分から一時間。今では手軽に日帰りができる、江戸時代の雰囲気を残す城下町である。

休日に訪れたので、公的機関からの情報が集められず、地元の方に聞いて回つたが、「S時事新報社」の正確な跡地は確認することができなかった。

島原城からは、市内を眺望



漁港

「孟宗忌」会場



第三十四回孟宗忌

できるだけではなく、対岸の金峰山や三角半島など熊本の土地を望むことができた。

また、昔からの港はひっそりとした佇まいであった。熊本への海の玄関であった百貫港のように、河口を利用したものであった。そこには坂本龍馬に関する案内板も、設置されていた。



講演会の様子



「第三十四回孟宗忌」碑前祭 (H.23.2.13)

2011年度(4月～12月)会計報告			
収 入		支 出	
繰越金	149,577	事務費	1,108
会費(35人)	71,000	通信費	11,920
利子	21	総会関連	10,211
		くまもと文化振興会関連費	25,000
		HP関連費	4,085
収入合計	220,598	支出合計	52,324
残 高			168,274

* 2011年度の会計報告は、総会時に行います。

* 2012年度会費(2,000円)の納入をお願いします。

「孟宗忌」の当日、もしくは「総会」当日に、会費を集めさせていただきます。

または、「総会」後に振替用紙を送付しますので、お振り込みください。

* 住所変更等がありましたら、下記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市神水本町6-40 緒方 宏章

TEL 096-381-9002

第三十五回 孟宗忌のご案内

日時…平成24年2月12日(日)

①午前11時～午前11時半 徳永直文学碑前

(立田山登山口、泰勝寺入口)

・ 献酒、献花。経過報告。

②午後2時半～午後4時半 熊本近代文学館ロビー

・ 朗読 「ある特派員」

・ 講演 講師…浦田義和氏(佐賀大学教授)

演題 「ある特派員」

③午後5時半～午後7時半 懇親会(十徳や)

(会費三千元…当日受付)

会員募集

会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

編集後記

今回は、NPO法人くまもと文化振興会の会報「三青鳥」創刊号・第2号を同封しています。是非ご一読ください。会報に関するご意見感想を、お寄せください。